

キリストを信じる者の驚くべき変貌

ヨハネ福音書4:27-30
【新改訳2017】

- 4:27 そのとき、弟子たちが戻って来て、イエスが女の人と話しておられるのを見て驚いた。だが、「何を求めですか」「なぜ彼女と話しておられるのですか」と言う人はだれもいなかった。
- 4:28 彼女は、自分の水がめを置いたまま町へ行き、人々に言った。
- 4:29 「来て、見てください。私がしたことを、すべて私に話した人がいます。もしかすると、この方がキリストなのではないでしょうか。」
- 4:30 そこで、人々は町を出て、イエスのもとにやって来た。

【祈りながら考えよう】

- (1) 町から戻って来た弟子たちが見て驚いたのはなぜですか。
- (2) 女は水を汲みに来たはずなのに、自分の水がめを置いて町へ行ったのはなぜですか。
- (3) サマリアの女はどのように証しましたか。

【解説】

(1) 何を見て驚いたのか

《そのとき、弟子たちが戻って来て、イエスが女の人と話しておられるのを見て驚いた。だが、「何を求めですか」「なぜ彼女と話しておられるのですか」と言う人はだれもいなかった》(27節)

イエス・キリストを信じる時、その人の生活は全く変わる。それは他の人の目を見張らせるものがある。今日の学びの個所にも、その例を見ることができる。

ただし、ここで注意しておきたいことは、このような劇的回心の体験がなければ救われているとは言えないと安易に断定を下さないようにしなければならないということである。

主イエス・キリストとサマリアの女が会話しているところへ、食物を買いに町へ行ってた弟子たちが帰って来た。帰って来た弟子たちは、主が旅の疲れと空腹のために、井戸端に座り込んでいるものとばかり思っていたのに、見知らぬサマリアの女と話し合っておられるのを見て驚いた。彼らが驚いたのには理由があった。

それは、当時、ユダヤ人が、日常生活において、特に戸外で女性と話をすることは悪いことと教えられていたからである。これは女性に対する偏見と差別に基づくもので、当時の習慣であった。少し前に、当のサマリアの婦人が驚いたと同様に、弟子たちも驚いた。

しかし、弟子たちがこの光景を見て「驚いた」のは、主が話し合っている女性の生き生きとした姿に対してでもあった。弟子たちにとって、彼女がそれ以前どのような生活をしてきたかは、知るよしもなかった。しかし、このように生き生きとした女性を彼らは余り見たことはなかったからである。

そこで、弟子たちは、主イエス・キリストに対して、「何を求めですか」とも、「なぜ彼女と話しておられるのですか」とも聞かなかった。

(2) 自分の水がめを置いたまま町へ行って証しする

そうしていると、その「女は、自分の水がめを置いて町へ行ってしまった。彼女は水を汲みに来たのではないのか。だからこそ、水がめを持って来たのではないか。

それなのに、どうして水がめをそこに置いたまま、町へ行ってしまったのか。今までの彼女は、人目を避け、人が水を汲みに出て来ない時間を見はからって、井戸へ水を汲んでいたはずなのに、どうして今度は人々のいる町中へ出て行ったりしたのか。それは、彼女が町へ行って何を言ったかによって分かる。



彼女は水がめを置いて行っただけでなく、何と町の中へ入って行った。人は救われるとすぐに、いのちの水が必要な他の人たちのことを思いやり始めるものである。

イギリスに生まれ、中国に渡って伝道に身をささげた19世紀の偉大な宣教師であり中国奥地宣教師の創立者であるハドソン・テイラー(1832-1905)はこう言った。

「ぜひとも使徒の継承者になりたい、と願う人がいる。しかし、私はむしろサマリアの女の継承者になりたい。使徒たちは食べ物を探しに出かけに行ったが、サマリアの女は、魂を熱心に思うあまり、水がめを置き忘れるほどだったからだ。」

イエスが女に向かって、自分がメシアだと告げられると、「彼女は、自分の水がめを置いたまま町へ行き、人々に言った「来て、見てください。私がしたことを、すべて私に話した人がいます。」と述べられている。

彼女が町へ行ったのは、自分を全く変えてくださったキリストを、他の人たちに伝えるためであった。ここにおいて、彼女が全く新しく造り変えられたことが分かる。



もはや以前のように人々を恐れ、人々を避ける彼女ではない。自分の人生をすっかり変え、消極的に人を避けて生きてきた人生から、積極的に救い主を人々に伝える人生に変えられた。

《だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。

古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました》(Ⅱコリント5:17)。

ここで大切なことは、彼女がこのようなことをしているのは、生まれ変わった者は出て行って、救い主を伝えなさいと、主イエス・キリストから言われて、しびしび出て行ったのではないということである。

彼女の人生が変えられた時、そうしないではいられなかった。これこそ、神の救いの恵みのみわざにほかならない。救いの恵みがその人の心の中に入ると、それまで持っていた考え方は、すべて力を失ってしまう。自分の肉欲や、人を恐れる思いの奴隷となっていたところから解放され、神の聖い思いが充満し、神のご用のために何かをしないではいられなくなる。

彼女だけではない。新約聖書を見ると、取税人マタイもそうであった。救いの恵みが彼の心の中に入ると、彼は収税所にそのままいることができなくなってしまった。

《イエスはそこから進んで行き、マタイという人が収税所に座っているのを見て、

「わたしについて来なさい」と言われた。すると、彼は立ち上がってイエスに従った》(マタイ9:9)。

パウロもそうだった。救いの恵みが彼の心の中に入ると、それまで異端であると確信して、迫害していたキリスト信仰を宣べ伝えるために、自分の有望な将来をことごとく捨ててしまった

《ただちに諸会堂で、「この方こそ神の子です」とイエスのことを宣べ伝え始めた》(使徒9:20)。

これは、今日でも同様である。しかし、このような劇的な回心が少ないことは事実である。たとい回心そのものは劇的であろうとなかろうと問題ではないが、救いの恵みに圧倒されて、この世の事を二の次とする人が少ないことは残念なことである。それは、キリストの救いの恵みについて本当に知っているのかということが問われなければならない。キリストによる救いの恵みの中にも、この世的な、また人間的な考えが入ってきてしまって、救いの恵みが純粋に受け取れていないからではないのか。

パウロは、自分の体験について、次のように述べている。

《しかし私は、自分にとって得であったこのようなすべてのものを、キリストのゆえに損と思うようになりました。

それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、私はすべてを損とと思っています。私はキリストのゆえにすべてを失いましたが、それらはちりあくただと考えています》(ペリピ3:7-8)

これは、キリストの救いの恵みの絶大な価値を知った人が、その他の相対的な価値しかないものを、はっきり心の中で整理することができた人の言葉である。サマリアの女もそうであった。

そして彼女は、今まで避けて生きてきた人々の所へ出て行って、自分の人生を造り変えてくださった救い主キリストを彼らに語らずにはいられなかった。これがキリストによって造り変えられた人の姿である。

(3) サマリアの女の証し

サマリアの女は、どのようにキリストについて語ったのか。「来て、見てください。私がしたことを、すべて私に話した人がいます。もしかすると、この方がキリストなのではないでしょうか」

彼女の証しは、「来て、見てください」であった。むずかしい教理を語ったのではない。来て、キリストに出会ってくださいと言って、キリストと会うことへの招きをしているだけである。彼女は、キリストのすばらしさを知った時、それを自分ひとりで心の中にしまっておくことができなかった。

彼女がキリストとの出会いで経験したことは、キリストが「私のしたこと全部を私に言った人」であった。彼女のすべてをご存知の方、しかもこの醜い自分をそのまま受け入れてくださった方である。しかも彼女は、「この方がキリストなのではないでしょうか」と言って控え目である。

「この方こそキリストです」というふうには断定的には言わず、「この方こそキリストなのではないでしょうか」と言っている。これは、彼女に確信がなかったからではなく、専門の宗教家ではない彼女が、しかも救われたばかりで何も分からない者として語ることできた精一杯の証しの言葉だからである。

私たちも同じである。むずかしい神学用語など必要ない。正確な専門用語など不要である。むしろキリストの救いの恵みにあずかったのであれば、その救い主を大胆に紹介する救霊の愛が必要である。

彼女の証しによって、それを聞いた「人々は町を出て、イエスのもとにやって来た」。彼女のつたない証しでも、スカル町の人々はそれに聞き従った。滅んで行く人がどうなっても構わないと考えている人は、はたして自分が救われているのかどうか問うてみる必要がある。